

グローバル時代におけるICT政策に関するタスクフォース
地球的課題検討部会（第2回）

1. 日時：平成21年11月27日（金）17:00～18:00

2. 場所：総務省第1特別会議室

3. 出席者：

（1）構成員（座長・座長代理を除き五十音順、敬称略）

金子 郁容（座長）、村上 輝康（座長代理）、喜多 伸一、木下 敏之、小菅 敏夫、須藤 修、
関口 和一、野原 佐和子、森 俊介、山田 肇

（2）総務省

内藤総務副大臣、長谷川総務大臣政務官、鈴木事務次官、寺崎総務審議官、小笠原情報
通信国際戦略局長、山川情報流通行政局長、桜井総合通信基盤局長、原政策統括官、田
中官房総括審議官、河内官房総括審議官、久保田官房審議官、利根川官房審議官、谷情
報通信国際戦略局次長、南情報通信国際戦略局参事官、谷脇情報通信政策課長

4. 議事

（1）内藤総務副大臣挨拶

（2）意見交換

- ・構成員プレゼンテーション（村上座長代理）
- ・フリーディスカッション

5. 議事録

【金子座長】 それでは、定刻となりましたので、グローバル時代におけるICT政策
に関するタスクフォース、地球的課題検討部会第2回会合を開催させていただきます。

皆様方、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。本日、議事
進行を務めさせていただきます、座長の金子でございます。よろしく願いいたしま
す。

今日は、委員の皆様は全員出席ということで、大変すばらしいなと思っております。

副大臣は、公務で多少おくらしているということでございますが、間もなく到着をす
るというふうに聞いております。

今日は、あらかじめ申し上げますが、この会議はネット中継が入っております。多
分、行政刷新会議仕分け作業と比べると視聴率は大分低いのではないかなと懸念して

おりますが（笑）、基本的には大変いいことでございます。ネット中継がむだと言われ
ないように活発な議論を繰り広げていきたいというふうに思います（笑）ので、どう
ぞよろしくお願いいたします。

これは第2回で、数え方は、前回のほかの部会との合同開催も1回と数えるという
ことだそうです。前は時間が大変少なくて、皆様方、一言ずつしかいただけなかつ
たんですが、今日から本格的な議論を始めたいと思っております。内藤副大臣がご到
着次第、ごあいさつなり、お言葉をいただきたいと思っておりますけれども、今日は、
これから皆様方のご意見を伺うところから始めたいと思っております。

前回の合同部会において各構成員の方々から出された意見のうち、ICTに関連の
あるものをまとめたものを、事務局が作成した「地球的課題とICT利活用の現状に
ついて」の資料とともにお配りしております。メールで皆様方に、今日、ご意見、何
かプレゼンテーションをしていただける方がいらっしゃったら手を挙げてくださ
いをお願いしたんですが、皆様方、あんまりシャイな方ばかりとは思えないんです
が、今回は1人も手を挙げていただけませんでした。多分、次回からもっともっ
とたくさん積極的に手を挙げていただけると思いますが、ということで、村上座長
代理に最初に口火を切っていただくことをお願いしました。これからお話しいた
だくことは、この部会で何をやるかということを決めるということではございませ
んので、1人の意見としてこれから皆様のご意見をたくさん聞かせていただきなが
ら、だんだんと決めていきたいと思っております。

では、プレゼンテーションの後、少しフリーディスカッションもしたいと思いま
すので、村上座長代理のほうからよろしくお願ひしたいと思ひます。

【村上座長代理】 ほかにいらっしゃらなかったということもあり、座長のご指示を
いただきましたので、「地球的課題検討部会におけるアプローチ」ということで発言
させていただきます。政権が変わってこれからICT政策もパラダイムが変わって
いくんだと思います。そういう中で地球的課題について我々これから数カ月議論
をしていくということなんですが、現状認識と基本的なスタンスについて資料を
お持ちしましたので、お話をさせていただければと思います。次、お願ひします。

皆様の前に出ていますチャートは、7月の段階の日本の国のICT戦略の体系を
示したものです。ことし2月からの半年間というのはIT戦略にとって非常にプロ
ダクティブな半年間だったわけでありまして、i-Japan戦略がまとまり、u-Ja

p a n政策の次のICTビジョンがスマートユビキタスネット社会実現戦略としてまとまり、その中核になると思われます電波政策が電波新産業創出戦略としてまとまりました。通信・放送の融合法制も報告書が出ました。そういう状態だったわけですが、夏休みが終わって帰ってきたら世界はがらっと180度変わってしまいました。総選挙の結果、8月30日の段階で、一応、こういうつくったものというのはいずれ一度白紙に戻ったという形になります。これでこの分野には戸惑いと不安が広がりましたが、10月にこのタスクフォースが編成されて、これからの展開についてすし光が見えてきたという段階かと思えます。今まであるものがどんな色に染まっていくのか、あるいは、今、国のICT戦略は白紙なのですが、これが今までのものとどういう関係になるのかというのはこれから固まっていくということになります。このタスクフォースが、IT戦略の議論のトップバッターになりますので、いい議論をしていく必要があるかと思えます。

この基本的なアプローチの方向性につきましてどんな側面を取り上げていくか、ということなんですが、150年ぐらい前にアメリカの民主主義がスタートしたときには、government of the people, by the people, for the peopleということが言われました。そのひそみに倣いまして、地球的課題への挑戦で、by the ICT, of the ICT, for the ICTという3つの側面について、お話をさせていただければと思います。

まず最初はby the ICT、つまりICTで何をやるかということですが、これまでの日本のICT政策は、電子政府、医療、教育という3つのテーマを中心的な課題に据えて議論をしてまいりました。このスライドはIT新改革戦略の評価のこれまでの経緯ですけれども、毎年、医療とか電子政府、教育・人材、テレワークというようなどころを中心にして見てきたということになります。

次のスライドはi-Japan戦略ですけれども、ここでも電子政府・電子自治体、医療・健康、教育・人材という分野を重点分野として考えるということをやりました。須藤先生とか私はこの評価の仕事をずっとやってきたわけですが、四、五年やってきました、この分野は思ったようにはなかなか進まなかったというのが実感でございます。この3つの分野というのは、国と最終的な利用者、国民との間にあります中間的な組織、医療ですと医療機関ですし、教育・人材ですと学校になるわけですが、そういう中間的な組織を効率化していくことによってICTの利活用を推進していこうというスタンスだったかと思えますが、やってみまして、これらの中間的

な組織というのは、ICTの利活用を思い切って推進する動機づけといいますか、モチベーションがそんなに強くない組織ばかりだったということもあってあまりはかばかしくなかったわけです。現在の段階でその重点分野について改めて考えるということであれば、もう少し最終利用者のための価値創造につながるようなことに力を入れていく必要があるんじゃないかというふうに考えます。つまり、もっとユーザーセントリックであるべきだし、こういうご時世ですから、もっと需要創出的で雇用創造的な施策を展開する。それから、社会システム全体の基本的なフレームワーク、あるいはアーキテクチャーを変えていくようなことに資するようなICT利活用を行っていく。省庁横断的なアプローチと、技術と制度の一体的な解決が必要な分野、今はこういうことをやれる絶好のチャンスなんじゃないかと思います。そういう視点で、まず重点を置いてこれから地球的課題を日本で、あるいはアジアの国々に対して提案していく領域としましては、ICTの利活用による医・食・住の日本型の21世紀社会システムの確立という、大きく構えるとこういうところを重点分野とすべきではないかと思います。20世紀の「いしょくじゅう」は衣・食・住だったんですけども、21世紀は確実に医・食・住が中核になるかと思っています。

まず「医」ですけれども、これまでは、このポンチ絵の右側のレシピのオンライン化だとか電子カルテの共有だとかという、中間的な組織の効率化をやってきたわけですけれども、これからの「医」の安全安心システムというのは、患者や利用者そのものに直接訴求するような、救急医療ですとか、周産期医療だとか、診療予約、遠隔医療、在宅診療、高齢者の見守りとか、前回、金子座長からお話のありましたような遠隔保健とか予防医療をコミュニティーケアを使ってやるというようなアジア的なアプローチ、こういう「医」のシステムをほかの国の模範になるような形で確立していくということが、一つあるかと思っています。

もう一つは、21世紀型の「食」の自立的高信頼システムということですが、これまで「食」につきましては、トレーサビリティという視点でいろいろ議論をしてきたわけですが、どちらかというとこれらは小売の場で議論されてきたということがあります。わかってきたのは、もっと上流へとさかのぼっていかないとトレーサビリティも供給の問題も解決できないということで、最終的にはICTを使った農業に及ぶようなもの、あるいはトレーサビリティの問題も、日本の自給率を想定しますと、中国だとかアジア諸国、あるいは米国までトレーサビリティが及ばな

いと意味がないということも、よくわかってきております。食についてはこういうものの。

それから、「住」は当然地球温暖化対策でありまして、これまでのICT政策というのは、家の中にたくさん機器がありますけれども、こういう機器を豊かにしていくということと、それらをモバイルなユビキタス端末で統合してネットワーク化をしていくというような考え方で進められてきました。今は新たにスマートメーターをどうするかという課題が出て参りました。一方では太陽電池だとか風力のような分散型電源を家庭セクターで使っていく、もう片方では交通セクターで、ハイブリッドカーだとか、電気自動車だとか、インフォイルモーター型の電気自動車だとかを組み込んで電力系統につなげていくような仕組みを、家庭のエネルギー需要をコントロールできるような形でどこまでできるかというスマートグリッドの考え方にどう対応するか、というのが重要な分野となります。このスマートメーターの部分は、もちろんエネルギー問題、環境問題でもあるわけですが、これは同時に重要な情報通信の課題だというふうに思っています。こういうふうな21世紀型のサステイナブルなシステムを考えていくことが、地球的課題の主要テーマになるのではないかと思います。

この辺で一旦きりたいと思います。

【金子座長】 ありがとうございます。

村上さんの話、前半が終わったところでございますが、内藤副大臣のお時間もあると思いますので、ここで、一言ごあいさつをいただきたいと思います。

副大臣は今、経済対策や地球温暖化対策の取りまとめで、いろいろご苦労されていると聞いておりますので、今の村上さんの話もありますので、もしそういうことあれば、少し言及していただけるとありがたいです。

【内藤総務副大臣】 わかりました。

皆さん、こんばんは。大変お世話になっております。総務副大臣の内藤正光でございますが、本日は、このように大変遅い時間、そしてまた大変お忙しい中を、金子座長はじめ皆様方には、当タスクフォースにご出席をいただきまして、本当にありがとうございます。

さて、金子座長からもございましたように、このタスクフォースは、ITの持つさまざまな可能性を忌憚ない議論を深めていただきたいという場でございます。ITというのは、ICTと私たち呼ばさせていただいているわけでございますが、以前は、

人と人とを、1人と1人を結ぶ単なるコミュニケーション手段であったものが、今やその可能性は大きく広がり、教育だとか、あるいは環境の分野へと広がっているわけでございます。私と原口大臣、まだ政権交代前だったんですが、シンガポールに行きまして、教育現場にICTが活用されている現場を見てまいりました。私たちはどんなものかなという程度で見に行ったんですが、ICTがここまで教育の質を変えるんだということをまざまざと見せつけられた、そんな思いでございます。それこそ一言で言えば、1対40の授業というものが、1対1という、誰もが皆、参加意識を持ちながら、子供たちが本当に熱心に教育に溶け込み、そしてまた、子供たち1人1人が持つ潜在力がぐっと引き出される、そんな質を大きく変える可能性を持っているんだなあということを実感してまいりました。

そしてまた、環境の分野でもしかりでございます。今、世界の国々は、ICTの環境分野への貢献、これはかなり大きいものがあるということで研究を続けているわけでございますが、我が総務省としても、いや内閣としても、スマートグリッドということで実は来年度の冒頭の二次補正に大きな予算枠をつけて動き出そうとしているわけでございます。ICTのスマートグリッド、今、村上先生が既にお述べいただいたわけでございますが、まさにすべてを、都市全体を結んで究極の省エネを実現していくというものでございまして、その本質はICTでございます。どうか皆様方からの忌憚のない意見をいただきながら、もう来年度の予算枠はとりましたので、ダイナミックな行動を起こしていきたいと思っておりますので、この辺につきましても、皆様方のご支援をお願いしたいと思います。

さて、最後になりますが、皆様方に改めて言わずもがなのことを申し上げさせていただきますと、この場は、今までの審議会ではございません。タスクフォースです。審議会とタスクフォース、一体何が違うのと、よく言われます。審議会というのは、誤解を恐れずに言うならば、今までのことを所与のものとしてシングルイシューが諮問されて、それを議論すると。しかし、環境は大きく変わったわけでございます。そういった大きく環境が変わった中、シングルイシューを幾ら議論しても何も変わらない。つまり、私たちはフレームそのものを変えていかなきゃいけない、ダイナミックな議論を私たちは期待しているわけでございます。どうか、タスクフォースというこの枠の中で、忌憚のない、今までの既成概念にとらわれない議論を巻き起こしていただきたい、そして、ダイナミックな提言をこのタスクフォースでつくり上げていただ

きたい、そう期待をしながら、私たち、原口大臣を先頭に皆様方の議論を見守っていく。そしてまた同時に、私たちも議論の中に参加をさせていただきたいと思います。どうか、皆様方は大変お忙しいとは思いますが、本当に精力的な、金子座長を先頭とする皆様方の献身的な議論を心からお願い申し上げまして、あいさつとさせていただきます。

そして、冒頭、金子座長からございましたように、実は私は二次補正予算案をつくるメンバーでもございますので、ちょっとこれから行かなければなりません。このこと、おわびを申し上げさせていただきます。どうぞよろしくお願いをいたします。

【金子座長】 ありがとうございます。

我々は、お金があるからやるとか、やらないということでは決してないと思いますけれども、しかし予算がないと何もできませんので、その辺は頑張ってくださいたいと。長谷川政務官も、よろしくお願ひしたいと思ひます。

(内藤総務副大臣退席)

【金子座長】 ちょうどいいタイミングでスマートグリッドの話が出てまいりましたけれども、村上さんのお話の後半部分を続けていただきたいと思ひます。

よろしくお願ひします。

【村上座長代理】 ということで、電子政府、医療、教育から、生活者のための医・食・住というところに大きなシフトをしたらどうかというのが、一つの提案でございます。地球的課題への対応を進めていくためには、ICTそのものが変わっていかなければならないところはございます。これまでの3年間、総務省では、ICT国際競争力会議の枠組みが動いて、クローズドでドメスティックでガラパゴス状態になっているICT産業の問題を多様な側面から議論してまいりました。ガラパゴス化から脱してもっとオープンでグローバルな世界に出ていく必要があるわけですが、出ていくときに、20世紀と21世紀で違いますことは、これまでは米国、EU、日本というようなところでの経済活動中心でよかったわけですが、今後はもう一つの大きな固まりが自分たちよりも所得水準の低いところから出てくるという、新興国群経済への対応という問題がございます。この仮想計算は、たくさんの仮定を設けてやっているわけですが、この2035年の絵を見ても、日本国内だけで経済活動をやっていくということがもう意味を持たなくなるということがよくわかりますし、米、欧、日という枠組みだけじゃなくて、所得水準の低いところで急成長する新興国で何をやるか

ということがすごく大事になってくるということが、よく理解できるわけであります。

次のチャートは、縦軸に製品の機能の、あるいは性能の追求というところを持ち、横軸にグローバルなオペレーション能力強化の追求を配して、日本がこれまでどんなことをやってきたかということと、これからどういうことをやるべきかを見たものなのですが、これまでは、この左側のを上へ上へと、機能を拡大し、性能を追求し、安定させていくということで、日本のICTは成長してきました。それが、右側に向けて、サムソンだとかノキアはどんどんグローバル・オペレーションを拡大していくのに、なぜ日本の場合はこれができないんだろうかということでこれまでガラパゴス化の議論を行ってきたわけです。しかしながら、そうこうしているうちにもう一つの問題が出てきたように思います。

それは、さらにそれを右側の、第1象限から第4象限に下げるような、インドのTATAの自動車、ナノが典型ですけれども、新興国が生み出す非常にベーシックな商品が、その国だけじゃなくて、普遍的な価値、ユニバーサルな価値を持って、アフリカにも行くかもしれないし、南米にも行くかもしれないようなものになってくるという、ユニバーサル商品を生み出していくという現象が出てまいりました。ガラパゴス化に対する対応ということでは、技術外交の展開だとかブランド戦略だとかという形で日本発のグローバル商品を世界にどう訴求していくかという議論をしてきたわけですが、今後はそれだけでなく、同時に、新興国と一緒にユニバーサル商品というものをどうやって生み出していくかということが大きな課題になってこようかと思っています。グローバル化だけを考えていくと2周おくれになる可能性があるというのが、今の状況かと思っています。したがって、国際共生力を増すような形での支援というのがいろんな側面で求められているというのが、2番目のポイントです。

3番目は、for the ICTということなのですが、日本のICT利活用のシーンというのは、これまで常に産業が主導して、あるいは官が主導して、生活者はそれに従うという形で来ましたが、しかし、インターネット以降、これが全く逆転してしまいました。産消が逆転してしまったということです。日本の個人のICT利用者は確実に世界最先端のICT環境で利用をしているわけで、有線は100メガ、無線は、WiMAXができれば40メガ、2テラのハードディスクが比較的安価に手に入ります。普通ですと軍隊が使うようなGPSを使い、銀行が使うような電子マネーを使い、警察が使うような指紋認証を日常的に使っています。ひるがえって個人じゃなくて企業のCI

〇が何を考えているかという、セキュリティ対策だとか、個人情報保護とか、内部統制、BCP、SAM、グリーン対策等々、結局、今持っているシステム、あるいは情報資産をどう守っていくかという、どちらかという後ろ向きの対応にこれまでずっとエネルギーを使ってきたように思います。これは政府でも同じで、レガシーマイグレーションだとか、最適化計画だとかということ言われてきたということなわけです。

日本の個人の利用者のICTの利活用パラダイムは、インターネットが入って、Webコンピューティングからブロードバンド化が進みました。さらにそれがユビキタスネット化に進んでいっています。その中でWeb 2.0という利活用の仕方出ました。さらに、これからスマートユビキタスネット社会が実現していくということになると、個人はさらにその次のステージに行こうとしている訳です。しかしながら企業のほうはまだ、CSSからWebコンピューティングに進んで、やっと今、ブロードバンド化を活用すべくクラウドコンピューティングなんかに着目し始めているということで、まだ次のステージには企業は行ってないし、行政はひよっとしたら、メインフレームからオープン系へということで、もう一つ前の段階でうろろうしているのかもしれない。これからの大きな問題は、そういう個人の非常に先端的な利活用に対して、企業・行政が少なくともそれと一緒にやれる、あるいは同期化できるようなところを持っていく必要があるということではないかと思います。ただ、それを手とり足とりということじゃなくて、そのための環境を整備するということが大事になってくるのではないかと思います。そのためには、IDの問題も重要ですし、利用サイドの人材育成も大事だし、クラウドの問題も非常に重要になってこようかと思えます。こういう産消の融合、官消の同期化ということが、産・官のイニシアチブのもとで進んでいくような姿を想定していくべきではないかというふうに思えます。

ただ、そういう取り組みの根底にありますのは、少なくとも個人に関する限り世界最先端のICTインフラがあるわけで、日本は利活用はちょっと劣っているわけですが、基盤については今も最先端のものを持っています。そういうものを維持でき、引き続き世界最先端を目指していくということが、今のようなアプローチの前提になろうかと思えます。これまで、ブロードバンドゼロ地域解消ですとか、ブロードバンドワイヤレスだとか、地上波のデジタル化だとかいうのをやってきたわけですが、さらにこれを、NGNだとか、クラウド、ワイヤレスフロンティアだとか、

センサーネットワーク等々に引き上げていく。常に、2番ではだめで、やっぱり最先端の環境をつくっていくという方向性のもとで、今申し上げたような3つの転換を考えるということが重要ではないかと思います。そういう中で地球的な課題を議論していくべきではないかというふうに思っております。

以上でございます。

【金子座長】 ありがとうございます。

先ほどの内藤副大臣のお話と、全然打ち合わせはしてなかったんですけども、かなり密接に関係するお話をいただきました。先ほど申し上げましたけれども、今のご発表はかなり具体的なお提案をいろいろいただきましたが、この部会はこれで行くということではございませんので、じっくり皆様方の意見を聞かせていただきながら進めたいというふうに思います。

このタスクフォースについては、先ほど副大臣のほうから普通の審議会とは違うんだということがございましたが、私もまだはっきりとどういうミッションが与えられているのか必ずしもよくわかってないところがございます。最後に長谷川政務官のほうから一言いただくときにご説明いただけるかもしれませんが、この間配られた1枚紙を見る限りは、政策決定プラットフォームという政策三役と座長・座長代理から構成されたところにこのタスクフォースの検討状況を報告するという、それから、政策決定プラットフォームから指示が出てくるというふうに書かれておりますので、そういう意味ではこれまでの審議会よりもより直接的に政策形成の場に近い部分もあるのかなと思いつつ、それについてはこれからだんだんとわかると思います。今日のところはとりあえず、私の意見は述べません。皆様方からの意見をちょうだいすることで進めたいなと思っています。

一言申し添えますと、ここに「地球的課題とICT利活用の現状について」という、ちょっと分厚いペーパーがございます。今日はこれについて議論するということはございませんけれども、さまざまなデータがございますので、関係のするところを後で見させていただきますと、例えば今の利活用のところは日本は結構おくられているんだとか、インフラは進んでいるんだみたいな話が出ておりますので、参考にいただければと思います。

時間がうまいこと進んでおりまして、まだ30分ほどございますので、今の村上さんのご発表についての質問なりご意見でも結構でございます。それから、それとは関

係ない、皆様方のご意見でも構いませんので、活発なご意見をいただきたい。ただ、30分ですので、1回の発言はなるべく手短かにしていただきたい。ちょっと長いときには私が「なるほど、なるほど」と2回言いますので、そのときはやめていただくということでお願いしたいと思います。「なるほど」って1回のはきは、本当に「なるほど」ということですので。それは冗談でございますけれども、今のご発表について何か、ご質問なり、ご意見なり、ございますでしょうか。

【木下構成員】 　　ちょっとよろしいですか、質問と意見に関連して。

【金子座長】 　　はい、ご自由に。今日はオープンな場でございますので。木下さん、よろしくをお願いします。

【木下構成員】 　　先ほどスマートグリッドのお話がありましたけれども、私、おととい、刷新会議の事業仕分けで仕分け人としてスマートグリッドに関する経済産業省の予算を廃止の方向に持っていったんですね。そのときの議論は、丸山さんという、今、シーガイアの支配人をされている方とか、事業投資に詳しい方がかなりいらっしゃって、一体、スマートグリッドで何年までにどういう市場を目指すんだとか、いつごろどれぐらいの規模のビジネスを想定しているんだとか、それから、スマートグリッドで各家庭の電気使用の情報が時系列で入った場合に発電所は運転効率すると、じゃあ何%効率化するんだということについての目標が、経済産業省の人はほとんどまともに答えられなかったんですね。ほかにも、私が聞いた質問もちゃんと返ってこなかった点が幾つかあって、要するに欧米が先行しているというふうの説明があったんですよ。だけど、どの分野がどう先行していて、日本の強みのある部分がどこで、だからここを開発したいんだという説明が経産省側から全然なかったんですが、村上先生は世界各国に詳しいと思いますが、スマートグリッドの世界的な状況は、今どんなふうになっているのでしょうか。

【村上座長代理】 　　今の前半のご議論の、スマートグリッドの効果がどうかというのは非常にごむたいな設問だと思うんですね。要するに、これは電力系統があって、系統に新たに加わる電源があって、家庭という全然別の原理で動いているものをつないでいこうということですね。系統そのものの動きについては電力会社はよく理解していると思いますが、新たな電源をつないだときに何が起こるか。あるいは、電気自動車という新しい蓄電の要素が入ってきている。その効率もわからない段階でこれの効果を測定して予測するというのは、普通の科学的なアプローチでは無理ですね。要する

にこれは、その効果を見ているというよりも、地球環境問題という大きな枠組みの問題があって、それにこういうアプローチをしてみたらどうかということです。最終的に、家庭セクターと交通セクターが変わらないと、25%というのは、解けない問題だと。それに対してこういうアプローチを始めてみたらどうかということですね。

先ほど申しましたユビキタスネット化の流れの中で申し上げますと、インターネットが入ってきて、バブルが発生したのですが、バブルが破裂して、一時期、世界中のICTがどこへ行っていいかわからない状態が来たわけですね。その真空状態の中で、日本はブロードバンド化という道を選んだと。その後、ユビキタスネットワーク化という、ネットの世界とリアルの世界をICTでつないでいくような取組みが活発化しました。そうこうしているうち一度破裂したバブルの中からもう一回、ネット空間をもっと豊かにしていこうというWeb 2.0のパラダイムが出てきたと。ユビキタスというネットとリアルをつなぐ取組みでは日本と韓国が先導しているいろんなことをやってきたわけなんです、そういう中でネットの世界をどんどん洗練させていくという方向性がもう一回出てきたわけですね。私の理解ではリアルの世界との接点を豊かにするというのは日本と韓国が先導しているというふうに見ていたわけですが、今スマートグリッドの分野で起こりつつあることは、例えばグーグルみたいな会社がスマートメーターについて活発な働きかけを行い始めている。我々の理解ですとグーグルというのはネットの世界をどんどん洗練させていくようなところでのWeb 2.0とか3.0という方向性でのプレーヤーだったはずなんです、もし、スマートメーターがグーグルとGEの先導で動く、それがデファクトスタンダードになるということになると、日本とか韓国がやってきたネットとリアルをつないでいくようなところでのイノベーションが一気にその中核を、こういう場でそういう発言をしていいのかわかりませんが、握られてしまう可能性があり、ICTのサイドからの認識では問題があると思います。ですから、その経済効果を数字ではじいてというのは、非常に難しいと思います。今はまだできないことを要求されていると思います。

【金子座長】 森さん、ご発言ください。

【森構成員】 私、東京理科大の森と申します。私の専門は、エネルギーシステム、環境システムということでございますが、たまたま深見座長のユビキタス社会からITと環境のこの委員会に参加させていただいております。

まず、スマートグリッドにつきましては、必ずしも新しいアイデアではなくて、こ

れまでの積み重ねの集大成にさらに新しく電気自動車が加わったものというふうに解釈しておりまして、これにICTは不可欠であると。この数値的な評価は、過去、研究の上では、例えば環境省の脱温暖化プロにもございますし、幾つかございます。大体10から20という数字もありますが、今ご指摘のとおり、全く新しいものに対してはどこまでできるんだろうということについては、本当に未知数であります。

それから、今、村上先生のおっしゃった、グーグルにやられちゃうんじゃないかという点は、実はこの前のICTによる環境のワーキングでもかなり強く指摘しておられまして、特にベンダーの方が指摘しておりまして、技術的には、個別技術は日本は相当に高いものを持っているけれども、これからパッケージとして海外に進出させたい。そのためには、標準化、それから特に、単なるインターフェースとしての標準化ではなくて、環境削減、省エネの寄与に関する評価の尺度の標準化は不可欠であるという、こういうご指摘が出ておりまして、またこれは、昨年、ちょっと前になりますが、地球温暖化に対するセクター別アプローチでも全く同じ問題が指摘できるところでございます。

このスマートグリッドに関しましては、技術の問題もさることながら、どうやって効果を計測するか、それ自体が大きな研究課題であると同時に、これを日本が積極的に発信することで逆に世界に売り出せるという、そういうものではないかというふうに考えております。

【金子座長】 じゃあ、野原さん、次は山田さん、お願いします。

【野原構成員】 話が変わってしまいますが、いいですか。

【金子座長】 この件については、山田さんはほかの？

【山田構成員】 違います。

【須藤構成員】 僕もスマートグリッドについて。

【金子座長】 じゃあ、この件だけ少しいきましょう。じゃあ、須藤さん。

【須藤構成員】 今、森委員がおっしゃったとおりだと思うんですが、今、実験で我々が注目しているのは、東京電力と沖縄電力と電力中央研究所が、宮古島は閉域ですので、ここで大規模発電と太陽光、直流・交流をどううまく調整するかとか、あと電圧管理、これはかなり大変なので、そういう実験をしながらデータエビデンスを整えているということです。だから、今の段階は、アウトカムは何だという段階ではなくて、あくまでも実験です。やらない限りは、データは出てこないですから。そうすること

によって、CO₂削減に貢献する。韓国は済州島で、やはり閉域系で同じ実験をします。そういうものを積み重ねない限りはサイエンスというか科学技術は進化しませんから、ここら辺は重視しなきゃいけない。

【金子座長】 だんだん仕分け会議のようになってきました。(笑)
どうぞ。

【木下構成員】 私、実験することを否定しているわけじゃないんですよ。私がある場で聞いたことは、例えば、プリミティブというふうな言い方を経産省の方はしたんですが、各家庭で個々の家電がどう使われているかというんじゃないくて、家が毎秒どれぐらい電気を使っているかということをインターネット上で送信するプリミティブなスマートメーターは、イタリアでもう何年も前から実用化されているんですね。そのところの発電効率がどうかという質問についても説明がなくて、私が言いたいのは、過去、日本の政府が技術開発をやっとうまくいかなかったパターンでほかの国がどこまで行っているとかよく見ないで、ともかくやらないかんということで突っ込んでいくと大体あまりうまくいかない。今回も、さっき政務官がおっしゃったのは、総務省で予算要求という話なんですかね。各省がばらばらに予算要求するとまたらくでもないことが起こるので、ほかの国はどこがすぐれていて、日本が勝っているところはどこかということをよく見きわめないと、うまくいかないんじゃないかと思っております。

ここからは私の意見のところなんですけど、私、韓国のことは幾つか知ってはいるんですけども、2003年に韓国の小学校に行ったときに、もう既に電子黒板が入っていたんですね。そのときに音楽の授業をコンピュータ使ってされていたんですが、日本の今の義務教育、小中学校の状況は、電子黒板の使い方すら、ソフトすらないという状況ですね。それから、アメリカの小学校の子供たちが佐賀市を訪問したときに、名刺交換したんですね。彼たちは名刺にアドレスが入ってまして、何に使うのって聞いたら、これは宿題をダウンロードするために必要なんですよと言ったのが、2001年か2002年ぐらいの話なんです。だけど、私は日本でもどこかほかの国よりすごいものがあるんじゃないかと期待してまして、そういう意味で世界的に貢献するんだったら、いろんな分野がありますけれども、ほかの国がどこまで行っていて、日本が勝っているところ、負けているところ、だれも手を出していないところということをぜひ事務局に整理いただけると、議論が深まるんじゃないかと思っております。

【金子座長】 わかりました。この件、もう1つ2つで、ちょっと……。

村上先生、どうぞ。

【村上座長代理】 私は一言だけ。要するに、評価をして1つに統合して、それを国のものとしてやる、それは非常に美しいですけども、こういうまったく新しいパラダイムを生み出していこうとする分野はおそらくまだ、そんなことができるレベルまで知的な蓄積がないと思います。

【木下構成員】 いや、私、統合したほうがいいなんて、一言も言ってません。

【村上座長代理】 そうですか。

【木下構成員】 ええ、言ってません。私が言っているのは、ほかの国の状況を知りたいと言っているだけなんです。進んでいるのか、進んでないのか、日本が強いところはどこなのかということを知りたいと言っているわけです。

【村上座長代理】 なるほど分かりました。私は、エネルギー供給という視点からのスマートグリッドへのアプローチ、これは当然やらなければいけないんですけども、もう1つ、通信のサイドから推進するという視点で進めるスマートグリッドに対するアプローチというの也有着いていいのではないかと思います。まだこの段階ではいろいろ多様なものがやられないと、わからない状態なんじゃないかというふうに思います。

【金子座長】 ありがとうございます。

私は今日意見を言わないと言ったんですが、スマートグリッドについてちょっと一言だけ。私は全然詳しくないんですが、これまでは電力供給というすごく大きな会社から一方的に送られてきたものを使っていくということだった。それが、これからは、1つ1つのコミュニティーとか地域との双方向のインタラクションのシステムになるという意味では地方主権にとってもすごく大きな変化です。ただし、ローカルオペティマムとグローバルオペティマムを調整しないとイケない。電圧の問題もそうで、電圧について言えば、電気自動車は多分、日本が世界に先駆けてたくさん入るとすれば、電気自動車に蓄電したものを活用するなどのシチュエーションもあるのかなと思いつつ、私は地方主権という観点から関心を持っております。木下さんのおっしゃることもそのとおりで、外国がやっているから日本もやれということではしようがないなということは、私も同感でございます。

関口さんはほかの件？

【関口構成員】 いや、違う。

【金子座長】 そうしたら、野原さん、山田さんに行ってから、関口さんに行きたいと思います。よろしくお願いします。

【野原構成員】 そんなに大きなテーマではないので、簡単にいきたいと思います。村上さんからのプレゼンテーションを聞いての質問とコメントなんですけれども、ガラパゴス化に対する対策ということで、これも一つどこかに入れることが必要なのかなというふうに思っているんですが、これまでのいろいろな場所での議論とか、いろいろなところでの議論に共通して感じる事なんですけれども、日本の主な企業がみんなガラパゴス化しているのような評価をされているんですが、きっとそうじゃないんだろうと、私は思っているんです。当然、海外に強いような企業はいっぱいあって、その人たちは、国内の市場ではそんなに大きな存在をしていないで、海外で主に頑張っていると。そういうように同時に両方で頑張るといことが大変なぐらい日本の市場が大きいからそうなっているわけで、日本の市場で頑張っている企業はガラパゴス化せざるを得ないような状況もあるということだと思うんですね。そこはちゃんと理解した上で、そういう結構大きな市場を持つ日本として、日本の中で頑張っている企業が今後どうするのかとか、あるいは、今後出てくる市場に対して、最初から海外とか、最初から国内とかいうことをどういうふうにとらえていくかと。なので、先ほどの1つにまとめるという話にも関連しますけれども、やっぱりきちんと分けてやっていかなきゃいけないし、プレーヤーも違うでしょうし、同じ企業の中でもしやるにしたって、部署が違って、人材も違うだろうということ全体できちんと認識する必要があるなど。決してステップ論にはならないということで、いろんなところで議論をしても、まずは日本で頑張って、いいのができたら海外に展開するというをいまだにずっと言われるということがよくあって、それは違うということをきちんと認識した上で全体のプランをどう考えるかということが重要なのではないかというふうに思います。

【金子座長】 次回以降、そういう例などもご紹介いただければと思います。

山田さん、お願いします。

【山田構成員】 村上さんのおっしゃったことの中の技術と制度の一体的解決が必要ということについて、ほんの数分、お話しさせていただきます。

遠隔医療とか、遠隔介護とか、さまざまな技術を今さら開発する必要はなくて、むしろ制度を変えるべき時期にあると思います。例えば、総務省から配付された別の参

考資料の54ページに情報アクセシビリティの話が出ています。僕はここに書いてあるJIS規格等の作成委員会の責任者をしていましたのでよくわかっていますが、これは、このようなガイドラインをつくるということについては、実は日本は非常に先行しています。そういう意味で技術はあります。しかし、実際には障害者や高齢者に利用できる機器は少なく、ウェブサイトにしても、政府や自治体のサイトでも山ほど欠点があります。どうしてそういうふうだめなのかというと、そういうものを推進しようという制度がないからです。アメリカの連邦政府の場合には、公共調達においては情報アクセシビリティの条件を満たさないものは購入してはいけないということになっていまして、それが動かす仕組みになっています。各社はそれを実現するために一生懸命努力しています。その結果何が起こるかということ、1つ前のページに字幕放送の話がついていますが、こんな古めかしい資料しか日本では出てきませんが、11月20日にユーチューブが、アメリカ国内からアップロードされたすべてのコンテンツについて字幕を自動付与するサービスをすぐに始めますというふうに言っています。日本でやろうと思えば、どのくらいの間違率があるのかとか、ちゃんと表現できるのかとか、いろいろ言うと思いますけれども、そんなこと気にせず、アメリカ人の英語ってほとんどきちとした英語ではないので字幕も乱れに乱れると思いますが、気にせずそれでビジネスを始める。でも、それは今言ったような規制にこたえるためであると同時に、そうやってつけた字幕というのが新しい検索キーになって、新しいビジネスが始まるわけですね。そういう意味で、こういう技術をまず議論するんじゃないくて、今、日本でできない制度は何か。例えば金子先生が紹介された遠隔介護とか遠隔健康診断というのが何で日本中でできないのかとか、そういうことをここで議論して、総務省の施策として何が変えられるのかとか、あるいは、もしかすると政府全体に提言しなきゃいけないことは何かあるのかというような議論をするのが必要だというふうに思います。

【金子座長】 ありがとうございます。そのとおりだと思います。

じゃあ、関口さん、お願いします。

【関口構成員】 日経新聞の関口でございます。よろしくお願いします。

先ほどの村上さんのお話を伺って、これまでもいろいろご一緒してきた経緯もあり、ここにおまとめになっていただいたことは全くそのとおりで、コンテンツについては全く異論はございません。ただ、「地球的課題検討部会におけるアプローチ」というタ

イトルと中身との整合性がどうかというところなんです。今回のこの検討部会にお招きいただいたときにタイトルを聞いて、何を話すんだろうというのがいま一つわからない、いまだにまだわからないんですけども、いきなり各論に入った嫌いがちょっとあるんですが、村上さんが述べられたことは多分、日本的課題の話なんだと思うんですね、ある意味では。それが、全世界、ユニバーサルにつながる話なんだと思うんですけども、かなりの分、日本の問題を多分ここで語られていると私は理解しているわけでありまして。そういったときに、本当に地球的課題というのは何を話すのか。技術の進展というのは国によってレベルも違えば、利活用のスタイルも違うし、文化も違うという中で、どこに焦点を当てて話すのかということをも確認したいと思います。ですから、これは意見というよりも質問になるのかもしれませんが、それがまず1点。

あともう1つは、先ほど来お話が出ていますように、日本は技術が進んでいるけど利活用がおくれているという点であります。これは、総務省のいろんな発表とか報告書を見てもそういう形で書かれていますので、我々も何となくそういうふうに思っています。だけど、本当にそうかなというのを、私は最近、非常に強く感じるわけでありまして。それはなぜかという、日本で言う技術が進んでいるというのは、スペックがすぐれているということだと思います。要するに、速いとか、安いとか、こういったところでは日本はスペックの競争をすると確かにいいですよ。けれども、それが実際にどれだけ利用されているかという、ほとんどあまり利用されていません。そうした状況を指して、本当に技術が進んでいると言えるのかどうか心配です。1つ例を挙げれば、例えばアップルのiPhone、この技術がすぐれているかという、1つ1つの技術はそんなに大してすぐれているわけじゃなくて、それをある意味でパッケージングしてみんなが使えるようにして、しかもそれが1つのプラットフォームとしてみんなが共有できるようになったからこそ、そこに意味が多分あると思うんですね。そういうことでいくと、日本の技術というのは全くお供しているということが言えるわけです。

さらにもっと言うのであれば、技術といっても、多分、日本で進んでいるというのは、携帯電話の普及が早かった、特に3Gのローンチが早かったとか、あるいは光ファイバーが進んでいるとか、この辺を指して進んでいると言いがちなんですけども、じゃあ今のネットワーク機器がどうなっているかという、世界に通用するネットワ

ーク機器をつくれる会社がこの国にはなくなっちゃっているわけですね。それは本当に技術があるかという、私は多分違うんじゃないかなと思うわけです。ですから、そういう意味でいきますと、先ほどのお話にもありましたように全くゼロベースで考えるのであれば、日本は技術が進んでいて利活用がおくれているという、この前提自体も取っ払って、本当に日本は進んでいるのかどうかということを見つめる必要があるんじゃないかと思います。

以上、その2点を申し上げたいと思います。

【金子座長】 ありがとうございます。地球的課題とは何かというのは、多分、皆様方も気になっていると思いますが、次回以降、こういう議論もしていきたいというふうに思います。

そろそろ時間がもう少しなんですけれども、全員発言していただかなきゃいけないということはないんですが、小菅さんと喜多さん、少しお話しいただければ。

じゃあ、小菅さんから。

【小菅構成員】 私も、今、関口さんからあったような意味で、この検討部会のねらいがどこにあるかというのはまだよく理解はしていないんですが、私自身は日本がいわゆるICTの利活用を一つのこととして国際社会にどのような役割を果たすべきかというようなことが非常に興味あるところなんです、そういう意味で、いわゆる外交戦略としてのICTというのが、今ほど日本にとって、残念ながらICTが国際社会で日本の役割というのが非常に落ちているということは、既によく我々は経験してきているわけですね。海外の国際協力の中で日本のICTの占めているパーセンテージというのは、非常に低い状況です。一方では、しかし日本のICT技術は非常に先端を行く方向でずっと来ています。だけど、実際にその技術を利用に具体化していくプロセスとしては、大変日本は、これはもちろん国の行政的な仕組みもありますし、そういうものが非常にそういうものをしにくくしてきたというふうに、私は思うんですね。ですから、実際に途上国で一体どういう技術とその国の発展やいろんな問題に活用できるかということに対する、聞く耳をあまり持っていなかったんじゃないか。すなわち、そこから出てくるニーズやシーズを私たちは具体的にICTの技術でそこに、いわゆる援助という形でも結構なんですけれども、そういう形で具体的に推し進めることのための仕組みというのが非常になくて、そういう意味では残念ながら、これはもちろんITそのものが既に現在は、日本のODAの仕組みというのが全くそ

れにそぐわない形になってしまったわけですね。ですけれども、私どもいずれの途上国に行っても言われることは、どうして日本は、いわゆる技術協力、あるいは具体的には、電気通信の分野、あるいはICTの分野での協力をもっと積極的にやらないのだろうかということはよく言われるわけですが、そのときの仕組みが既に残念ながらバイラテラルで、しかもアイトリアルガバメントではだめだというような仕組みができ上がっちゃっているわけですね。これは多分総務省だけの話ではなくて、いわゆる政府全体がこういう問題をもっと積極的に解決するような仕組みをつくっていかないとせっかくの技術は生かされないという状況が、今、途上国ではいっぱいあるわけですね。だから、今回のこの議論の中ではぜひそういうあたりも、そういう意味では省庁を超えた形でやっていかないといけない部分もかなりあるんじゃないかというふうに思っています。

【金子座長】 ありがとうございます。

 じゃあ、喜多さん、お願いします。

【喜多構成員】 神戸大学の喜多と申します。

 今までの議論を伺っておりまして、やはり欠けているのは評価の問題。評価というのは、機器の開発であれ、情報通信であれ、使う側がどのように使いやすいかという、それが多分ちゃんとした方式がない。それは、日本人にとって使いやすいというものもありますし、世界の人たちにとって使いやすいというものもあるでしょう。それはさまざまあるかと思いますが、人間はそう大きく違うわけではない。そういう意味で評価の問題をちゃんと確立していけば、世界的な問題というのに対処できる、そういう可能性はあると思います。

 ただ、評価の問題というのであれば、先ほどスマートグリッドであれば、尺度ですか、それのところにあらわれていたように思いますし、村上さんのプレゼンの中では、21ページのTATAのナノは、ベーシックな機能だけであるんだけど、そのほうが使いやすい。こういう問題は実際、私は仕事としてよく企業の人と組んでやっているんですけど、企業の方なんかとも話していて、そういう問題になることがあります。高度な技術を持っているので、できるだけその技術を使いたいんだけど、その技術を使ってしまったがゆえに使いにくくなって市場がむしろとれない、そういうことはまああるんです。似たようなことは多分、もっと大きな規模、官庁がやっているようなお仕事なんかでもあるかと思うんですが、その評価方式がちゃんとしていな

い。こういった委員会でも、評価について詳しい人がそれほどいるかというと——評価というのは、個人が使うという意味の評価です。それがこれまでずっと欠けていたんだなというのは痛感しております。今後、何とかそちらのほうをやっていきたいと考えております。

【金子座長】 ありがとうございました。

オープンエンドな形でいろいろ議論いただきました。時間も迫ってまいりましたが、長谷川政務官のほうから、何か一言いただけますでしょうか。

よろしく申し上げます。

一言と言ったけど、二言、三言でも結構でございます。

【長谷川政務官】 おそれいます。大変おもしろいと言ったら失礼ですが、刺激的な議論を聞かせていただいております。私が発言するのももったいないぐらいで、もっといろいろご意見を伺いたいと思うんですけども、そういう意味ですごい場を原口大臣はつくったなということで、この成果に非常に期待をするわけでありますが、同時に本当に話がまとまるのかなというふうにも思ったり、それから途中で、地球的課題って一体何だろうと、何が自分たちのミッションなんだろうというようなお話もありましたが、そこは勝手にお考えいただいているのではないかとこのように、私は思います。随分無責任なことを申し上げるようですけれども、今、原口大臣が皆さん方に期待をしているのは、政権がかわったこの機会に、ICTという一つの道具といましようか、それを通じて、この国をもっとどういうふうによくできるのか、国民の皆さんをもっとどう幸せにできるのか、あるいは世界にももっとどうやって貢献できるのか、そういうことを今までの積み重ねとは離れてひとつご提言を頂きたいというところが基本だと思ひまして、したがって、我々も途中で座長・座長代理とご一緒に議論に参加をさせていただくという機会も持たせていただくというふうに聞いておりますので、どうぞわいわいと大いに議論をしていただければ大変ありがたいなというふうに思っております。そんな感想でございますが、同時につくづく感じておりますのは、政治の貧困と行政の硬直化でございます。

以上でございます。

【金子座長】 ありがとうございました。

時間が来ましたが、一言だけ何かここで言うておきたいという方はいらっしゃいますでしょうか。

【須藤構成員】 すみません、よろしいですか。

【金子座長】 じゃあ、30秒ぐらいでお願いします。

【須藤構成員】 競争と効率的な投資ということで、今回の仕分けで、また仕分けになりますけれども、重複は避けるべきだとあるので、確かにそのとおりでとは思いますが、方法論が違えば同じターゲットをやるというのは意義があることで、青色発光ダイオードでも、日亜化学だけじゃなくて、NTTとか、ソニーとか、いろいろやっている中で開発された要素がインテグレートされて日亜化学の青色発光ダイオードに結実したということがあります。アメリカのフューチャーインターネットの研究も、60チームを動かして、その中ですぐれたものに重点的に予算をつけるという形でやっています。そういう柔軟な競争を生かした技術の開発、それからインテグレートしていくということ、これがむしろ政府に求められる。何かばらばらに動かしちゃだめなんですから、うまくそれをマネジメントするということが求められるんじゃないかと思います。イノベーションで重要だと思います。

【金子座長】 ありがとうございます。

今日は、大変活発な議論をいただきました。今日のところはまだ、方向性が出たり、まとまりはなかったと思いますが、これをスタートにして、次回以降、もう少しストラクチャーをつくって議論するのかなという気もいたしますが、一方で、次回ぐらいはもう1回、自由議論があってもいいのかなというふうな気もしております。

なお、環境のテーマについては、先ほど副大臣のほうからもお話があったように、政府において2020年を念頭に置いた検討を進めているというふうに伺っております。2020年におけるICTの利活用によるCO₂の削減効果を試算するという事は、ベーシックなデータとして必要だということでございます。本部会での議論にも有益な材料となると考えておりますので、専門家による作業チームを立ち上げてICTの効果というものを試算していただきたいと思っておりますが、その点、いかがでしょうか。ご賛同いただければ、座長のほうで作業チームのメンバーなどをご相談させていただきながら選出して、作業を進めていただきたいと思っております。よろしいでしょうか。

何か、関口さん。

【関口構成員】 時間なんですけれども、今回は事実上、個別部会の初回の初顔合わせみたいな感じになると思うので1時間でしたけど、やはり2時間ぐらいやらないとな

らないと思うので、今回はそういう設定でお願いできればと思います。

【金子座長】 わかりました。今日は政務官にずっといていただいたんですけども、2時間だとそれはしんどいとか、そういうのはあると思いますが……。

【長谷川政務官】 我々、あまり参考になりませんから、いてもいなくても同じでございますから、どうぞおやりになってください。

【金子座長】 参考になるというより、いていただくことが大事じゃないかなと思いますが、1時間ではちょっと……。

【関口構成員】 最低でも1時間半は。

【金子座長】 そうですね。1時間はあっという間に過ぎてしまいますので、それは、また事務局方とも相談しながら、検討させていただきたいと思います。

本日頂戴しました意見は、政務三役と座長・座長代理にどのように扱うかはご一任いただきながら、次回以降、さらに議論を続けたいと思います。

次回については、またまとまったプレゼンテーションをしていただくのか、それとも、今日みたいな短い議論の応酬がいいのかということについて、また、時間の幅についても少し検討をさせていただいて、ご意見があったらどンドン事務局ないし私のほうにメールをいただければと思います。

何かございますか。

【関口構成員】 外部から来ていただいてお話しいただくということも……。

【金子座長】 そのこともあると思います。今回は、外部よりも、まだ内部で話をして、ゆくゆく、どのぐらいの頻度で開催するかはまだ決めていませんけれども、外部から来ていただくということも当然あると思います。

【野原構成員】 すみません、言わずもがななんですけれども、地球的課題って何をやるのというのは、もうちょっとないと何を議論していいかわからないですし、あまり発散だけしていても仕方がないと思いますので、何かみんなが共通に浮かんだものを見ながら議論できるようにするのいいのかなと。

【金子座長】 わかりました。それについても……。

【関口構成員】 先ほどの長谷川さんのお話では自由に考えてほしいということなんですけれども、少なくともこのタイトルを決めるときには頭の裏に何かあってこういうタイトルが多分出てきているんじゃないかと思うので、タイトルをつけられた方に、何を想定したのかというのをぜひお聞きしたいと思うんです。

【金子座長】 参考として聞いて……。

【須藤構成員】 座長のほうから、次はこれに焦点を当てたいということを、アジェンダを設定していただければと。

【金子座長】 私の感じでは、今回はもう1回ぐらい自由ディスカッションですが、それにしてももうちょっと、これとこれの3つぐらいの感じでもって例えば地球的課題とは何かについて、そうすると事前に少しご意見をいただくということもあるかと思えますので、その辺は宿題にさせていただきたいと思えます。

それでは、時間を5分過ぎましたけれども、ご議論いただきました。次回の日程などについて事務局からご説明をお願いしたいと思いますので、谷脇課長、よろしくお願ひします。

【谷脇情報通信政策課長】 ありがとうございます。

次回の会合の日程につきましては、また別途、事務局のほうからご連絡をさせていただきます、調整をさせていただきたいと思えますので、よろしくお願ひ申し上げます。

【金子座長】 私のほうも、皆様に最後にいただいた意見を十分に踏まえて、提案をさせていただきます。私のほうは、何でもいいからというふうには言わないように、もう少し絞ってやりたいと思えます。

それでは、第2回の会合を終了させていただきたいと思えます。お忙しい中、どうもありがとうございました。またよろしくお願ひいたします。

以上